## 三、家出

「ただいま 」

「あら、お帰り。早かったわね 」

睦美が帰宅すると、まだパジャマ姿の母、高島紀香が出迎えた。普段は仕事に追われて化粧をする暇も無い母だが、今は起き抜けにも関わらず目元が化粧の痕があり、汗でべとりと乱れていた。髪と襟元と同じように……。

「…… 」

独特の汗臭さを感じつつ、気付かないふりをして通り抜ける。寝所では乱れたシーツと高いびきをかく父の姿が見えたが視線は外す。

「……あのさ、この前見せたプリントだけど…… 」

思い出し、声のトーンをおさえて尋ねてみる。学童保育の話は両親にとっても良い話なので、淡い期待があった。

「何かあったかしら？ ああ、学童保育のこと？ うちは必要ないでしょ。睦美がいるんだから 」

「でも、あたしも勉強したいし、私立の受験を考えてるの 」

「私立？ あんた私立に行くつもりなの？ うちはそんなにお金ないし、まだまさるも小さいのよ？ そんな余裕あるわけないじゃない 」

途端に表情が険しくなる紀香。

「今は私立にも助成金があるし、公立とそんなに変わらないわ 」

「それなら公立でいいじゃない。皆と一緒の鬼瓦校になんの不満があるの？ 」

「あたしは勉強したいの 」

「してどうするの？ 」

「え……？ 」

「してどうするのよ 」

予想外の返答に睦美は言葉を失う。それを論破と勘違いした紀香は上手く言いくるめたと思ったらしく、腰に手を当て悠然と見返す。

「だって、私は……勉強して…… 」

良い学校に入って良い大学に入って、就職先を広げて村を出る……。それが良い事だとずっと思っていた。だが、母は違うらしい。

「勉強してどうするの？ そんな暇があったら少しでも早く仕事に出て、家にお金を入れてもらわないと……。ウチは裕福じゃないんだから 」

「だ、って……そんな……え？ 本気で言ってるの……？ 」

「だってそうでしょ。生きていくにはお金が必要なのよ？ 睦美だってい つまでも子供じゃいられないんだから 」

「…… 」

ため息混じりに告げる母に睦美は瞬きも忘れていた。
「良い学校に入ったからってお金になるわけじゃないでしょ？　良い大学出ても仕事できなくて引きこもってる人なんていくらでもいるじゃない。大学なんて行くだけ無駄よ。そんなところ行かなくてもお父さんお母さんみたくしっかり働けるんだから……」
「なにが……」
「？」
「何がしっかり働けるだ！　お前らが高卒で子供なんて作るから貧乏なんだろ！　あたしはあんた達の家政婦じゃないんだ！　ふざけるな！！」
「ちょ、睦美……どうしたのよ急に……。落ち着きなさいよ。お父さん、まだ寝てるんだから……」
「何が寝てるだ！　ずっと寝てたんだろ！　今度は妹か？　また弟？　その世話は誰がするの？　お金が無い？　当たり前じゃない。金も無いのにセックスばっかりして子供作ってさ。バカみたい。あ、バカだもんね。汗水たらして働いて、大卒の人に顎で使われて外国の発泡酒飲んで喚いて、壁の薄い家なのにアンアンやってるんでしょ？　貧乏なのに子供ばっかり。子供を家政婦、んーん、奴隷かなんかと勘違いしてるでしょ。だからそんなことできるんでしょ！」
「睦美！」
「！」
頬に熱い衝撃。視線が揺れる。頬を叩かれたのだと気づいた時、涙がこぼれた。痛みと悔しさ、悲しさ、そして未来への希望の無さと、身近な人の浅はかさが塊となって溢れた。
「誰のおかげで食べていけると思ってるの！　いっぱしの口をきくのは自分でお金を稼いでから言いなさい。義務も果たさないで権利ばかり！　あんたみたいな頭でっかちな子は世間に出たら恥かくわ」
「あんたみたいな母が居る方が恥ずかしい！」
睦美は紀香を睨み返すと涙を拭い、あてもなく飛び出していった。
「待ちなさい！　睦美！」
行くあてなど無い。だが、ここに居たくない。どこへ行けばいいのかなんてわからず、感情に任せてただただ……。

＊＊

昼前に帰宅した徹は麦茶を飲みながらのんびりしていた。

帰ったらすぐに寝て明日の朝まで起きないつもりだったけれど、自宅の安心感と開放感にすぐに元気になっていた。

慣れないことをするとストレスがたまるのだとしみじみ思い、日々労働に勤しむ両親に向い手を合わせていた。

「徹、電話よ。あんた高島さん知らない？」

電話があったのは小腹がすいたので昼食前に軽くとそうめんを啜っていたころだった。

長くゆでられていたそれは麺がぺたりとくっついていてのど越しさわやかと言いづらく、急に声を掛けられたのもあって咽ていた。

「え……イインチョ……」

ドキッとする。昨日一緒にお風呂に入ったあの子。真奈と同じく大きなおっぱいを揺らしていた。それを思い出し股間に力が向かう。同時に彼女が一体何の電話だろうか？　もしかして昨日のことを……。

「なんか家に帰った後、お母さんと喧嘩して家出だって……」

「え？　あ、なんだ……そう。喧嘩か……。イインチョらしくないなあ……」

彼女の家庭事情は弟の世話が忙しいくらいしか知らないけれど、学校生活の彼女の評判を知る限り喧嘩をするような人とも思えない。

「はい、徹です」

『高杉君か。すまないね。休んでいたところ……。ええと、高島さんが家出したって聞いたんだけど、高杉君は彼女が行きそうなところを知らないかい？　気になったところで良いんだ。少しでも手がかりを知りたくて』

意外に思いつつ電話を受け取ると、相手は井沢元治だった。

「すみません、僕はちょっとわかりません」

『そう。じゃあ、もし何かわかったらコミュニティセンターに連絡をしてくれないかい？今、先生もそこに居るから』

「はい、わかりました……」

徹が頷くと元治はすぐ電話を切った。別の子にも電話をしているのかもしれない。

「うーん……」

家出という言葉に不安が募る。鬼瓦村は交通量こそ少ないものの、山側では野生動物が出る。クマのような凶暴なものこそいないものの、蛇やアライグマなど人に危害を加えるものも多い。中途半端に開けた山は山菜やキノコ採りが楽しまれるけれど、年に数回は遭難騒ぎがある。

徹も少し前は山のふもとに秘密基地を作って遊んだことがあり、家出と称して遅くまで

居たことがある。けれど虫や動物の気配を感じながらの暗闇に音を上げたものだ。
睦美が山に隠れたというわけではないだろうけれど、他に誰にも知られずに身を寄せられる場所も無く、行きつく先はそれ以外に考えられない。仮に居なくとも、居ないことが確認できるから捜索も無駄ではない。
それに最近では大蛇村側で不審者の目撃報告もされており、何か事件に巻き込まれるともわからない。
「俺、ちょっと見回って来るよ」
「晩御飯までには帰って来なさいよ」
「はーい」
居ても立っても居られず、徹は家を出ていた。

「おーい、徹！」
村の大きな道路に出たところで健介が手を振ってやって来た。
「おお、健介。なんかイインチョが」
「いいんちょ？　高島がどうかしたのか？」
彼の所には電話が来ていないのか、目をぱちくりしていた。
「なんか家出したって、それで探そうと思ってさ」
「そうなのか……。いや、俺はてっきり真奈が」
「真奈？　真奈がどうかしたのか？」
「その、なんか今朝、変な気がしたから」
「疲れてたんじゃないか？　俺もさっきまでくたくただったし」
「そっか……」
「俺は鬼の眉隠れを探すから、お前もどこかイインチョが行きそうな場所見てくれよ」
鬼の眉隠れは鬼瓦山へ登りやすい道の一つで、災いから隠れて登ることができることからそう呼ばれていた。
昔はその付近に秘密基地を作っていたので、人が入りやすく隠れやすく、うってつけだと思えたからだ。
「ああ、わかったよ」
健介は歯切れ悪く頷くと、そのまま別れた。
今朝の真奈はと言えば、せいぜい寝坊をしていたぐらいで、何があったとも思えない。だから今は睦美の行方を探すことの方が優先事項。そう思った……。

鬼の眉隠れを探すも特に誰かが入った形跡は無かった。
当てが外れたまま山道を登り、鬼首神社へとたどり着く。
鬼瓦村の神社の一つで、瓦屋根の社がある。かつて暴れた鬼の牙から社を守るためにと

硬い瓦で覆われたそうだ。鬼の歯も瓦には立たず、その隙に渡辺公により首を取られた。その鬼の首を祭る神社とされているが、ワタナベノツナが鬼瓦村を訪れたという記録もなく、伝承としては眉唾モノ。

普段は人が居ない寂しい場所だが秋祭りの時はそこそこにぎわう。鬼瓦山より出し鬼と戦い、大蛇川にて打ち取り、この神社に打ち取った鬼の首を奉納して祭りの終わりとする行事があるせいだ。

その際は秋の寒空で夕暮れ時に大蛇川付近を法被姿で駆け回るため、非常に寒いと聞かされている。見る分には楽しめるのだが、今年は徹達も祭りに参加する年であり、今から憂鬱であった。

「ったく、なんであんな祭りあるんだか……」

ぼやきながら神社にお参りをする徹。社には祭りで使う神輿や道具がしまわれており、神社というより物置のよう。

金目のモノも無いためか、正面の鍵こそかかっているものの、裏側の戸は外すことができる簡易なモノ。

ありがたみの無い社を前に徹は家出した睦美が見つかるようにと手を合わせて拝んでみる。

「神様仏さま、高島さんが家出したそうです。なんか心配なんでどこに居るか教えてください。むにゃむにゃ」

拝む時に何を言えば良いのかわからず適当に呟くと、何か物音がした。振り返るも特に何も無い。気のせいかと思い、頬を掻くと、今度は社の方から声がした。

「……お前は高島睦美が心配なのか？」

「え！？　お、おい、誰だよ……」

「……わしは神じゃ。この鬼首神社にまつられた鬼……」

「鬼？　神じゃないの？」

「……黙って聞け。高島睦美は鬼の生贄として今より三刻後に喰らうつもりじゃ……。お前が本当に大切に思うならば、今より三刻の間に代わりのにえを用意せよ」

「三刻って言われてもなあ……。俺、時計持ってないし、何時間なのか知らんがな」

しわがれた老人の声を作っているつもりだろうけれど若さが見え隠れする。あまり聞きなれていない声だけれど昨日あたりから覚えがある。

「ニエは鬼丑蛙、蛇川のアユ、そして鬼瓦せんべいじゃ」

徹はそんな言葉など気にせず社の方を調べ始める。するとスモークガラスの隙間から人影が見えた。おそらくそれが声の主。

「……別に集められるけどよぉ、イインチョはそんなもん欲しいのか？」

「……くくく、あーあ、もうばれた……」

がらりと扉が開き、睦美が顔を出す。

「探したんだぞ……。ったく」

「あはは、ごめん。心配させたみたいで悪かったわね。でもなんで高杉が？」
「井沢先生から電話があったんだよ。多分、今日のメンバーに電話があったんじゃないか？　でも健介は聞いてないっぽいからなんでだろ」
「ふうん。高杉は頼みやすいんじゃない？」
「そうか？」
「だって、探しに来たのだって一人でしょ？　誰かに頼まれたわけじゃなく」
「……ああ、そうだった」
思い返し、特に探すように頼まれた覚えはない。勝手に想像の中で危険を連想してしまい、たまたまここへ来たわけだ。
「で、なんでここに居ると思ったの？」
「ん？　それは……、ここは入りやすいし、隠れるならと思って」
「そうね。良い推理だったね。おめでとう」
くすくす笑う睦美はいつもと違ってテンションが高い気がする。普段の彼女は知らないけれど、昨日のため息ばかりの印象とは違っていた。
「んじゃ、俺は先生に連絡してこないと……、ほら、戻るぞ。っていうか、なんで社の中に居たんだよ。祟られるぞ？」
「祟りなんてばかばかしい。っていうか、あたし、帰りたくないし」
事情を中途半端にしか知らない徹は首を傾げ考える。もし無理にここで連れ戻そうとしても同じことを繰り返すだろう。仮に一人で連絡したとして、元治の到着を待つほど馬鹿でもないだろう。彼女の機嫌を損なわずに教員に知らせる方法を探っていた。
「ふうん。ま、無事ならそれでいいけどな。それより中ってどうなってるんだ？」
それとは別に社の内側が気になりだす。荷物置き場ではあるが、神を冠するだけあって何か神秘的な雰囲気を感じていたからだ。
「こらこら、神社なんだから敬いなさいよ。祟られるわよ？」
「勝手に入ってるイインチョが言うなよな」
そう言いつつも徹は内側へと入って行った……。

内側は特に変わった様子も無く、白い壁と木目の見える床板の簡素な部屋。普段人が出入りしないこともあり、埃っぽさがある程度。壁紙も安物で日差しの当たる場所は日焼が見え、内側の方はノリが乾いて剥がれていた。
近くにあった液状糊を手に剥がれかけた壁紙を張り直す徹。背が届かないので跳ねていると睦美が背伸びして代わりに貼ってくれた。
「さんきゅ」
「どういたしまして。っていうか、わざわざそんなことしなくても」
「なんか気になってさ」
「ふーん」

壁紙を直したところで今度は隅の埃が気になり始める。近くの箒を手に掃くと、睦美がチリトリを用意してくれる。
「サンキュ 」
「いえいえ 」
睦美が他の女子に比べて大人っぽく感じるところはこういうところだろうと思った。相手の動作を見てさりげなくフォローをしてくれる。普段から無口だけれど、こちらの内心を推測してくれる包括感があった。
「やっぱイインチョだなあ 」
「何が？ 」
「いや。別に 」
「ふうん。変な徹 」
普段から付き合いは無いけれど、今日の睦美はいつもの印象よりもよくしゃべる気がした。いつもクラス委員の仕事や弟のことで忙しなく走り回っているイメージの方が強かったからだ。
二人きりの寂しい空間と家出という非日常な行動が彼女の持つ内面を醸しているのかもしれないと思えた。
「んで？ どうすんだ？ 帰るつもりはないの？ 」
「……」
フランクな態度の彼女に自然な気持ちで尋ねてしまったが、やはりかなり気にしているらしく眉を顰めて唇を尖らせる。
能天気な愛なら少しでも不満があればすぐぶーぶー文句を言うけれど、彼女のそういう態度は意外だった。
「なんだろうなあ。一応、皆心配してるから連絡したいんだけどなあ……」
頭を掻きながらもすぐには行動に移さない。普段理知的な睦美がこのようなことをしたのなら、面倒な理屈もあるのだろうと思いはかってのこと。
「徹ってホントつまんない男ね……」
ぶすっと漏らす睦美にむっとする。
「誰がつまらない男だ。馬鹿にすんな。何が不満だかしらんけど、楽しいことならいくらでも転がってるだろ 」
「どこによ。こんな村、どこにも何も無いじゃない 」
「くくく、委員長先生は何も知りませんなぁ……」
意味深に笑うと徹は一人先に社を出る。
「ちょっと、待ちなさいよ。アタシは家に帰るつもりなんか……」
てっきり麓に降りて教員に連絡するのかと思ったが、彼はむしろ山の奥へと向かう。
「ちょっと、危ないわよ。山に登るなんて……」
鬼瓦山は村人に親しまれているとはいえ、山は山。道を違えれば遭難の憂き目に遭う。

だが、徹はそんな睦美の心配をよそに山を登る。
「ちょっと……」
自分より背の小さい徹。つまらないとなじったことで怒ったのだろうか？　小さくなる背中に手のかかる弟を重ねてしまい、睦美は急いで彼を追いかけた。

「待ちなさいってば……。危ないわよ。山の奥なんて……」
「そんな場所に隠れてたのは誰だよ」
「あたしは別に……。神社までだし、こんな場所……」
比較的草木の少ない道。人の出入りがあるのだろうけれど、少しでも彼の行く道を外れれば足をとられ、靴が泥だらけになってしまう。
岩の上をすたすたと行く徹は道を知っているかのようにすいすい歩いており、まるで仙人のようにすら思えた。
「……ちょっと徹……待ちなさい。危ないわ。遭難するわよ」
やや怒気を込めて言うも徹は止まらない。むしろ歩く場所をしっかり教えて欲しいと請う意味での怒りすらあった。
「もう……、先生に言うわよ。山の奥まで来て……」
立ち止まる徹を見つけてようやく追いついた睦美。少し前までの立場がいつの間にか逆転していた。
いつの間にか木々のざわめきとは別の音がしていた。水のせせらぎだ。初夏の頃、多少の運動で汗ばむ身体を冷ますに心地よい音だった。
徹はそんな彼女を気に留めず、近くの細い竹を捩じり折る。先っぽに細い草を捩じった糸を結びつけ、先に何かを結んでいた。
「何してるの？」
「ん？　これはだな……、お、持って持って」
釣り竿のようになっている竹を受け取ると、手応えがある。振動は風のせいではない。何だろう。やまめだろうか？　澄んだ水の中、すいすいと泳ぐ影が見える。
「釣り？」
普段から仕事仕事と忙しい両親からは特にそういう遊びを教えてもらったこともない。普段から年の離れた弟の世話をする彼女は友達と川へ釣りに行くようなこともできず、知ってはいても未知の経験だった。
「焦るなよ。すぐ逃げられるからな。いいか。相手が食い込んだ時に引っ張るんだ。合図するぞ」
「う、うん……」
ドキドキしながら合図を待つ。
「いち、に……、よし、いまだ」

「えい！」
言われるままに引っ張る睦美。竹竿の先端には何かデカイモノが見えた。確かな手ごたえもある。
「やった！」
釣り上げた何かを石の上に放りだす。初の釣果に睦美は未知の興奮を覚える。
普段から村の子として自然の中で過ごして来た。そんな自分が、同じ村で育っていたはずの子から新たな体験を教えてもらえたということ。
獲物の手応えは数百グラムに満たないというのに心に届くモノは大きな花火がぱっと夜空に弾けるような広がりを感じさせた。
「よしよし、やるじゃないか。昭なんか鈍いからな。逃がしちゃうのにな」
「ふふん。当然よ」
わくわくしながら獲物を見に行く睦美。山の川で取れると言えばアユやイワナ。食べるつもりはないけれど、それを笹の葉に包んで持ち帰れば欲しいと言う人も多いだろう。
そんな妄想をしながら竿の先をみるけれど、そこに居たのは緑の塊。
「え……？」
そいつは毛むくじゃらの何かをそしゃくしながらげこげこ泣いていた。
「か、カエル！？　きゃー！」
それが睦美の方に跳ねた時、彼女は悲鳴を上げて手近なモノにしがみ付く。
「もう！　釣りなのになんでカエルが居るのよ！　もしかして帰るとカエルを掛けた冗談のつもり！？　もう怒った！　絶対帰らないんだから！　っていうか、あっち行って……。いや、来ないで……」
「お、落ち着けよ……。別にそんなつもりじゃないって……。ここはよくカエルが釣れるんだってば……。というか、苦しい……」
ふと気づくと胸に圧迫感。手にざらっとした楽しくなる感覚。抱きしめていたのは徹の後頭部。丸刈りの彼の後頭部は見かけると逆撫でしたくなるとたまに思っていた。当然、それを抱きしめるとなれば彼の顔は背丈の差の都合、彼女の胸元に……。
「え？　あ、ごめん」
「ったく……委員長でも慌てるんだな」
「当たり前でしょ。というか、あたし爬虫類は苦手なの」
「カエルは両生類だぞ」
「一緒でしょ」
そう言いつつ、確かに違うと冷静になる睦美。他にやもりとイモリも分類が違うと思うも、理科の勉強などもう不要なのだと思うと急に気持ちが萎んでいく。せっかく徹が遊びに連れてきてくれているというのに。
「ごめん、ありがと」
「ん？　いいって。それよりこっちだぞ」

「え？　あ、ちょっと……どこ行くのよ……。奥に行くなんて危ないってば……　」
徹はさらに川の上流へと向かう。山の地理に詳しくない彼女はここに一人置いて行かれるのも怖く、仕方なくついていく。
「待ちなさいっての……、もう、猿みたいな奴ね……　」
運動はできる方。持久力やソフトボール投げでも女子上位になると自負していた。けれどアスレチックのような山道を行く中、徹に追いつくのもかなり厳しい。自分が山登り用の恰好でないというのもあるが、それは徹も同じ。彼の靴は靴紐がほどけかけて伸びている危なっかしいもの。それなのにすいすい進む。まるで自分の庭、縄張りのように……。
「もう、今度は……あ……　」
向かった先は色とりどりの草原。赤、青、黄色、紫が散らばる場所。白いふわふわした丸いモノはファンタジーの世界で妖精がちりばめるようなエフェクトに見える。
日が傾き始めて木洩れ日が線を成す。これから朝が始まるような期待と不安を醸す明暗。
大きく羽根を広げて飛ぶ虫も今は気にならない。まるでお伽噺の世界に紛れ込んだような気持ちにさせられた。
「うわあ、なにこれ……。すごいきれい……だし、カワイイ……　」
ファンシーな庭に踏み出そうとしたところで腕を掴まれる。振り返ると徹は無言で首を振る。目の前の物珍しいものに誘われた行為を拙速と恥じる睦美は頷き引き返す。
「あ、ごめん。そうだよね。ずかずか入ったら壊れちゃうもんね……　」
童話の住人になれないことは残念だけれど、遠くから幻想的な風景を眺めて我慢するべきと踏みとどまる。同時に徹がそういう自然の造りだす調和を守る繊細で誌的な感情を持っているのだと知り、ただの八方美人の根暗のお守り役という考えを改めた。
「ここのきのこ、毒キノコだからかぶれるからな　」
「え？　どくきのこ？　」
色とりどりの散らばりはよく見るとキノコの群れ。
「それと触ろうとしてたその白いの、カビだからな　」
「か、かび……　」
ふわふわしたそれは根本を見ると緑や赤とどぎつい青も見える。
スーパーで売れ残ったアオカビチーズですらここまでケミカルな青はしていなかった。
「じゃ、じゃあこのちょうちょは……　」
ちょうど近くの木に留まった虫を指差す。目いっぱい広げた羽根には幾何学的な模様があり、羽毛のようなふわふわ感を醸していた。
「それは蛾だぞ。留まる時に羽根を広げるのは蛾、閉じるのが蝶だ。はは、良かったな。新しいことを知れたぞ　」
「きゃー！！　」
本日二度目の悲鳴と苦しさに呻く徹の声。睦美はしばらく目を瞑り、胸元で呻く徹のことなど気にしていられなかった……。

「はぁはぁ……ったく、死ぬかと思った」
ようやく解放された徹はぜーはー息を切らせていた。
「ふんだ。本当はそれ目的だったんじゃないの？　徹っておっぱい大きい子が好きなんでしょ？」
「別に俺は……。というか、委員長が驚き過ぎなんだよ。さっきからキャーキャー。お前は女かよ」
「どっからどう見ても女でしょ？」
睦美は胸元を強調するように抱き、やや前のめりになって徹の前に見せつける。
慌てて顔を背ける彼を見て思った通りまだまだ照れが先に来るガキ臭い精神性と嗤いたくなる。その一方でなぜそんなことをしたのか戸惑ってしまう。
普段から仕事仕事で休みになれば……、そんな母の安直な欲求が不意に頭をよぎるのを思うと、結局は自分も彼女の娘なのだと自覚させられる。
そんな挑発をしたくなったのも原因の一端は彼にもある。ガキと嗤いつつもやはり徹だって……。
「まったく、ガキなんだから。ほら、もう気が澄んだでしょ？　ったく、変な場所を連れ回して……。いい加減帰るわよ」
「まあそう言いなさんな。あと一つあるんじゃよ。いひひひひ」
「何がイヒヒよ。カエル釣りにキノコとカビと蛾の楽園なんてまっぴらだわ」
「それがそうでもないんじゃよ」
妖怪というか老人じみたしゃべり方がいらだたせる。確か最近流行っていたゲームのキャラクターだろう。弟もたまに真似をしていた。つまり、やっぱりガキ。だからこの気持ちもおそらく気のせい……。
「ったく、それで最期よ。そこに行ったら帰るんだからね」
「へいへーい」
いつの間にか立場が逆転しているにも関わらず、睦美は仕方なく徹について行った……。

「ほら、あそこに見えるのが鬼瓦校。んで、あっちが三軒寺。温泉はでかかったぞ。今度行ってみろよ」
「へー……。ここって村が一望できるんだね……。すごーい」
最期に連れて来られたのは山の高台。簡素なベンチと屋根があり、屋根を上ると村を一度に視界に収めることができた。
まるでミニチュアの集まり。もしくはモザイク画のような村の全景に睦美は穏やかな気持ちになっていた。
ここ数日のいくつかの悩み。それらはあの狭い中にあるちっぽけな一つでしかない。

きっと今ここで脳天気などや顔を見せる同級生も何かしら悩みを持っているのだろう。
根暗な子もぺたんこな子も風邪をひきそうにない子も澄ました子も皆……。
まるで自分だけが不幸なのかと思い悲観していたことが恥ずかしく思える。自分の悩みも手の中に納まる景色の中の点の一つなのだと。
徹がまさかそんなことを教えてくれるためにここへ連れて来たくれたのだろうかと思うとはっとする。思っていたよりは大人びた彼。八方美人と貶していても、彼なりに他人を見ていてくれるから。きっと自分のことも見ていてくれたのだろう。
温かい。痛い。
最近、温かく、胸がいたい日がある。
病気かと思うも朝にはおさまっている。けれど、今こうしてぶり返している。
どういう時に起きる？　今。そして、そういえば最近にあったことは……。
その理由はもしかしたら？
「徹？」
ふと人の気配が無くなる。彼のことだから屋根から落ちるようなことは無い。ではどこに？　探すほどの場所も無い屋根の上周囲をきょろきょろしていると、徹が戻って来た。
「おーい」
「徹……。もう、どこ行ってたのよ。心配したじゃない」
「へへ、見て驚けよっと……」
「？　きゃっ……つめた……」
先ほどより手間取りつつ屋根に上る徹を不思議そうに見ていると、突然おでこに冷たい感触。よく冷えた缶のボトルだった。
「メロンソーダ？　果汁５％ねぇ……」
「ここでしか売ってないんだぜ。俺はたまにここに来た時、必ずこのジュース飲むんだ。山の上の方だからちょっと高いんだぞ。２００円もするんだからな」
「そうなんだ……」
地元のスーパーでは確かに見ないラベルの缶ボトル。言いにくいけれど模試で隣町に行った時に普通に見かけたもので、自販機で１３０円、スーパーなら８８円のたたき売り。
味もそれほど良いわけではなく、テレビでCMしているおかげで目立っているだけのそれを誇らし気に見せつける徹。彼なりのこの山のフルコースなのだろうと思うと珍品ぞろいでなんとも幼稚な遊びと評価が一つ下がる。
「んごく……ふぅ……おいし」
それでもなれない山道で疲れた喉には心地よい。
混じりっ気だらけの甘味料と塩分は身体に染みこんでいくような気がする。同時にいろいろなことを呑みこめた気もする。
「ありがと、徹……」
ごくりとまた一口飲む。

「おいおい、全部飲むなよな。俺の分も残しておいてくれよ 」
「え？ 奢りじゃないの？ 」
「バカ言え。なけなしのこずかいから二本も三本も買えるかよ 」
缶ボトルを奪い返され、徹は遠慮なくごくごくと飲み込む。
「あ…… 」
「なんだよ、まだ飲むか？ まあ、いいけどさ 」
口を拭いながら徹はボトルを投げ渡す。
「んと……。まあ、その……、いわゆる間接キス？ 」
「かん……なんだよ、キスなんてしてないだろ 」
「こうやって口付けたものをお互いで口つけてるんだから……そういうもんでしょ 」
「俺はそんなつもりで…… 」
徹が言いかけた時には残りをごくごくと飲み干していた。
「ぷはー。なーんてね……。徹ってば初心だから気にしてたんでしょ。あ、もしかしてあたしとキスしたかった？ ん？ してあげよっか？ 今日、遊んでくれたお礼に…… 」
「からかうなよ。っていうか、イインチョ、いつもと雰囲気違うぞ？ 」
「別に？ あたしだってたまにはこうやって羽を伸ばしたいって……きゃっ！ 」
「おい 」
座ろうとしてそのまま屋根を滑り降りる睦美。徹も慌てて追いかける……も、背の高い彼女は難なく着地。徹はどさっと着地すると、慌てて彼女の背を庇うようにする。
「大丈夫だってば。そんなに心配しなくてもさ 」
「でも委員長は女の子だし…… 」
「え……あ、ふふ……。心配してくれるんだ。なんか新鮮。普段は頼られてばっかりなのになー 」
「女ってとろいし、すぐ泣くから…… 」
「…… 」
せっかく良い雰囲気なのにどうして……。
睦美は無言で徹の後頭部を叩いていた。
「ってーな……。なにすんだよ 」
「徹はこう……やっぱりガキなのよねぇ…… 」
「なんだよ。人をがきがき言いやがって。イインチョだって同い年だろ 」
「じゃあ、徹はあたしのこと、普通に同級生って思う？ 」
「え？ そりゃあ……まあ、委員長は大人だけどさ 」
「本当にそう思う？ 」
「んー……、やっぱほら、昨日だって落ち着いてたし、頼りになるなあ 」
と思って。そう言いかけた。
「お風呂、一緒に入った時とか？ 」

「うっ！」
昨日のアクシデントを思い出し、言葉に詰まる。いつになくからかいがちな睦美はやりづらい。ただ、彼女が先ほどよりずっと笑顔が多いのも気付いている。
彼女の口からも帰ると出ているし、もう……。
「なーんてね。徹は優しいからからかいやすいなー……」
「ったく、イインチョの性格ってこんなんだったのかよ……。心配して損した」
「……心配、してくれてたんだ……。そっか、そうだよね。探してくれてたんだもんね」
「あ、ええと、まあ……その……なんだろうなあ。別にその、イインチョだってたまには俺ら男の遊びをしていても良いと思うぞって言う感じで」
話が重くなりそうな気がして慌てて言葉を探す。ようやく収まりかけた気持ちが起きてしまうのも困りものだ。こういう時、強く引っ張れないのが愛や澪にからかわれる原因なのだろう。
「帰ろっか……」
「あ、ああ……」
言いだそうとしたことを先に言われるのもばつがわるい。結果としては良い事なのだけれど、それでもやはりこう、その心変わりが心配だった。
「なーに？　もう心配しなくていいよ。アタシはへーき。ほら、かえろ」
「ああ。おい、そっちじゃないぞ」
先ほどまでのけものみちを行こうとする睦美を呼び止め、徹は開けた道を示す。
「こっち。ハイキングコースで帰ろうぜ。イインチョ、疲れてるし、変な道だと足を痛めるぞ」
「ハイキングコース？」
「ああ」
言われて彼の指さす方を見るとある程度舗装された道があった。
細い丸太で階段を成した道。思えば昔遠足でここを歩いた記憶がある。こちらにきたことはないけれど、中腹辺りでゴハンを食べて……。そんな過去の記憶を呼び覚ましたところで、まるで手のひらのなかを回る孫悟空のような気持ちになれた。
「なによ。ここって鬼瓦山なの？」
「最初からそうだよ。神社からの道のりはちょっとしたアスレチックになってるぞ」
「……」
村に住んでいながら知らなかった地理になんだかなあと思いつつ、睦美は帰路につこうとした。
「あ、待って、徹」
「？　どしたの？」
徹の足元でしゃがみ込む睦美。ほどけかけていた靴紐を解き、改めて蝶結び。逆手になっているせいでやりづらそうだけれどすぐに綺麗な蝶になる。

「お、さすがイインチョ 」
「はいはい。こっちもね 」
もう片方の歪な蝶をただし、彼を見上げる。
「いくら慣れてるからって危ないわよ？ 」
「ああ、わりいわりい…… 」
照れくさそうに頭を掻く徹だが、何かに気付いたのかそっぽを向く。
「ちゃんと話聞きなさいよ…… 」
「わかったよ 」
「前向く 」
徹を引っ張る睦美だけれど、彼は頑なにそっぽを向く。その理由はしゃがみ込む睦美の首元から覗ける胸元。いろいろ駆け回ったことと不意の落下でブラジャーがずれていて、たわわなおっぱいは姿勢の加減で乳首をしっかり見せていた。
「……スケベ 」
「ちが、だからその、見ないようにですねぇ 」
「徹が女の子に優しいのってさ、エッチ目的？ 」
「あのなあ、人聞きの悪いこと言うなよな……。俺は別に 」
「今野さん、おっぱいだけは大きいもんね。徹って巨乳好きなんだね 」
「イインチョまでからかうなよな。俺は別に 」
「じゃあ嫌い？ 」
「……うっ 」
「……ふふ、あはは……冗談よ。っていうか、昨日も見たじゃない。あ、もしかしてまた見たくなったの？ 減るもんじゃないし。っていうか、徹も見せてくれたら見せてあげるよー。なんちゃって 」
「そういう冗談やめろよな。あんまりしつこいと先生に言い付けるからな 」
「その時は高杉君におっぱい見られましたって言う 」
「言ってろ 」
「今野さんに 」
「うっ…… 」
「ふふ、やっぱり今野さんが気になるんじゃない 」
「そういうわけじゃねーよ。俺はだな…… 」
「はいはい、徹はわかりやすいね……と……え…… 」
立ち上がる睦美と下を向いている徹。彼の尖らせた唇は睦美のおでこにそっと振れ、そのままアッパーカット。そんな彼の頬に慌てて彼を庇う睦美の唇が触れる。
「……ええと 」
「……事故ってことよね 」
お互い唇で互いに触れてしまったことを意識してしまうと言葉も少なくなる。

「ま、ほら、間接キスしてたし……そんなに今更意識しなくても……」
先ほどよりも畏まりつつ早口な睦美。
「あ、ああ……。なんだろ。まあ、その……ほら、帰ろ……な？」
「うん。ごめん。ありがと」
先を行く徹。睦美は歩きだそうとして立ち止まる。
「どうした？」
今更帰りたくないとだだをこねるような睦美でもないだろう。だが、しゃがみ込む彼女を見て、不安にもなる。
「ごめん。ちょっと足挫いたかも」
「そっか。肩貸すか？　あ、でも俺背が低いか……。ったく、こういう時にチビってのが嫌になる」
「そんなつもりじゃ」
「ほら……」
「なに？」
背中を向けてしゃがむ徹に何のまじないだろうと首を傾げる睦美。
「ここら辺は段差きついし、楽になるまでだ」
「まさか、おんぶ？」
「ああ」
「あのね、あたし、結構重いよ？」
「そこは軽いって言えよ。大丈夫だって。よく真奈を背負って降りたし」
「でも……」
「大丈夫だって。俺を信じろ」
「ごめん、疑う」
「背負ったまま降りるわけじゃないから安心しろよ。ほら、早く」
「……ほんと？　うん、じゃあ……」
足を挫いて運んでもらうなどとまるで童話のお姫様。日々弟の世話や家事に追われる自分はシンデレラにでもなったかのよう。リンゴの代わりのキノコと間接キスとおでこと頬へのキス。ちぐはぐなストーリーを連想しつつ、背の小さい王子様の背中に乗ってみる。
「よいしょっと」
彼は意外にも軽々と自分を持ち上げる。細い身体のどこにそんな力があるのかと不思議に思えるほどだった。
「徹、すごいね」
「普通普通」
「そっか。こういうの普通にできるんだね」
「ったりめーよ」
ゆっくりとした足取りで舗装された道をゆく徹。これまでに誰を背負ったのかはわから

ないけれど、彼なら女をとろいと言 っても相応かもしれない。そう思えた。
「徹 」
「ん？ 」
「ありがと 」
「足挫いたのは俺のせいでもあるし 」
「そっか。そだね。徹が変な道に誘 ったからだよね 」
「はは、その元気があるなら大丈夫だな 」
「っていうか、徹さ、もしかしてこうや っておんぶするまでが目的だ ったり？ 」
「あのなぁ…… 」
おっぱいを彼の背中に押し付ける。多分、この背中は根暗なあの子のお っぱいの感触もしっているはず。それに、さ っきは窮屈そうに勃 っていた。
「徹 って大人なのかもね 」
「イインチョほどじゃないって 」
「ふふ……。謙遜しちゃって 」
ぎゅっと手に力を込める。この前 の身体測定では確か４０キロ後半。かなりのお荷物具合にせめておっぱいの感触ぐらいは楽しませてあげたい。中腹に着いた時、勃起していたらからかってあげよう。その方がこの気を遣い過ぎる同級生も気楽でいられるだろうと思って……。

山の中腹を過ぎ、そろそろ道路が見え始めた頃、徹は背負っていた睦美を下ろした。まだ道が急なことと枯れ葉で滑りそうだったので安全そうな場所まで頑張ったわけだ。

「ありがと」

「ん」

徹は短く答えると先ほどとは違って無言のまま先へ行く。

「どうしたの？」

不思議に思いつつゆっくり降りると、井沢元治の姿が見えた。彼は車を出していたらしく、エンジンを掛けたままだった。

「井沢先生、どうしてここに？」

「さっき連絡を受けて待ってたんだ」

「連絡？」

いつの間に連絡をしたのだろう。徹はスマホや携帯電話を持たせてもらっていないはずなのに……。

そこまで考えて納得がいった。ジュースを買いに行った時だろう。村内で親しまれているとはいえ定期的に遭難を発生させる山だ。自販機近くなら連絡用に電話もある。目ざとい徹のことだから先に連絡をしていたのだろう。出たのが元治で良かった。これが勝行なら怒り任せに山を登って所かまわず怒鳴り散らしていたろうから。

「すみません、心配かけました」

「いやいや、無事でなによりだよ。僕はよそ者だし、山のことは全然素人だからさ。ちょっと大げさにしすぎたかな、なんて……」

気を遣っているのか軽い口調で頭を掻く元治。最初に大げさにしたのはどうせ母。娘が家出したと喚く姿が目に浮かぶ。それほどまでに心配してくれたのは意外だけれど……。

「なんか騙すみたいで悪かったな」

「いいよ。そろそろ帰るつもりだったし。それより先生、このことは……」

冷静になり始めると今度は体裁が気になりだす。もし村内中に連絡されていると思うと、明日学校で何を言われるかわからない。

「それなら大丈夫だよ。高杉君には連絡しちゃったけど、岩村先生が大げさにしたら混乱するからって他の子には連絡してないから」

勝行にしては意外な配慮であるが、一方で大事にして何か言われることを恐れた保身かもしれないと疑ってしまう。結果的にありがたい事ではあるが……。

「ご迷惑おかけしました。徹もありがとうね」

深く頭を下げ、自身の無軌道な行動を恥じ入る睦美。顔が熱くなりつつ、徹にも頭を下げるが、彼はそっぽを向いていた。どうやらまだおさまりが付いていないようだった。

「送っていくよ。さ、乗って」

「はい」

促されるままに車に乗る。徹は助手席に乗って道を指示していたが、彼はどうやら睦美

の家も知っている様子。彼女は彼の家がどこにあるかも知らないと言うのに……。
「高杉ってなんでも知ってるんだね」
「俺の家って今班長だし、市政便りと村内回覧板届けてるからな」
「ああ、そんなのあったね」
確かそんな役割が持ち回りであった気がする。睦美の両親は共働きと子供が小さいという理由で免除されていたからよく知らなかった。そして、届いても母は目を通すことなくそのまま捨てるとわかっている。
たまに目を通すことがあったけれど、学童保育や模試など色々気になる情報がある。そういう有益なことも理解する努力をせずにそのまま丸めてしまうのだ。
どうして働いても働いても楽にならないのか？　当然だ。自分から救いの手を探すことを放棄しているのだ。本来ならこうして差し伸べられているのに。
「……あたしも一緒か」
「ん？　どうした？」
「別に」
それは自分も一緒。周りには助けてくれる大人や同級生が居た。よそ者の保険医に頼りになる学年主任と八方美人なチビ同級生。おせっかいな子にも今度謝らないといけない。酷い事を言ったのだから。
疲れたふりをして横になる。顔を隠している間に車は止まる。先に元治と徹が出てなにごとか外が騒がしくなる。どうせ母がヒステリーを起こしているのだろう。それは心配だからというより、自分の所有物が不具合を起こした時に不満を漏らすというものだろう。事実、どうして衝突したのかなど、彼女は理解してくれないのだ。
そう思うとまた瞼が重くなる。

「睦美、反省したの？　もう、先生達に迷惑を掛けて！」
「……ごめんなさい」
ドアが開いて最初の一言がそれ。一応は元治の手前、謝罪の言葉を並べるが、結局何も変わらないのだろう。
「まあまあ、お母さん、そう頭ごなしに叱らずに。睦美さんは昨日の植え休みの時も率先して作業をしていただき、僕もふなれなせいか、とても助けてもらいました。というか、あんまり僕が頼りなくて重荷になったいたかな？　普段も保健室で弟さんの世話をしているようですし、クラス委員を務めてクラスをまとめている立派なお子さんじゃないですか。睦美さんは普段からこうして同級生や下級生、時に僕ら教員にまで頼られて、頼られ過ぎてるかもしれません。そういうストレスが良く働くことも、悪く影響することもありますし、今回のハイキングはそういう気分転換になったと僕は思います。はい、養護教諭としての立場から言わせてもらっています。ただ、やはりどんなに大人びているといっても睦

美さんはまだまだ発展の途上にあります。ですから、あまり縛り付けず、かといって緩すぎず、接していくべきと思います。ええ、私のような若輩が言うのも僭越ですけれど、ただ、こうして無事に帰ってきたのだし、当人からも反省の言葉を並べられていますし、あまりしつこく強く言うのはよした方がよいです。というのも多くの統計によるデータでではですね……」

いつになく弁舌の軽く長い元治に徹も睦美も呆気に取られていた。

普段から黙って静かに頷くばかりの人だと思っていたのに、今日はよく舌が滑る。彼なりに睦美のことを擁護するためなのだろうと思いつつも、イメージが大分違い、二人とも驚きを隠せなかった。

「ええ、わかりました。私としてもきつく叱り過ぎたかもしれません。ただ、今回のようなことが何度も繰り返されますと……」

「ええ、その時は私も教員としてしっかり指導をせざるを得ません。何も無責任な人間に育ってほしいと思っているわけではありませんから……。睦美さんも今回のことで色々学べたと思います」

「はい。井沢先生、ありがとうございます」

「うん。それじゃあ私はこの辺で……。公民館の片付けもありますから……」

「井沢先生、ありがとうございました。まだお若いのに大変ですよね……。本当にご迷惑おかけしました」

「いえいえ、生徒の指導こそ重要な仕事ですから」

お辞儀を繰り返す母の元治を見る目は先ほどまでの怒りと若輩への舐めたものから多少の尊敬を混ぜたモノへと変化していた。

「ほら、睦美。貴女もお礼を言いなさい」

「ありがとうございました」

「お母さん、私は職務について当然のことをしているだけですから、そんな気負わずに……。それでは失礼します。それと高杉君、悪いんだけど、公民館の片付け、手伝ってくれないかい？」

「え？　ああ、いいですけど……」

「先生、まだ片付け終わってないんですか？」

「ああ、その……」

言いにくそうに言葉をつぐむ元治に睦美ははっとする。自分の捜索に元治が駆り出されたせいで仕事が滞っているのだと察したのだ。

「ごめんなさい、あたしのせいですね。あの、あたしも手伝いたいです。いいですか？」

「え？　いや、その……」

「お母さん、良いよね。あたしのせいで先生に迷惑かけちゃったんだし、お手伝いしてくるから」

「睦美、あんたねぇ……」

母は額を抑えつつも少し時間を置きたい気持ちもある。感情的になって手を上げてしまった負い目と、娘の相手をすることの手間を考えると揺らぐ。それにたまの骨休めでもあるのだし、まだ残っている……。そう思い頷くことにした。

「先生達に失礼の無いようにね……」

「はい……。先生、そういうことだから」

「そ、そうかい？　そっか。ありがとう。はは……」

元治は作り笑いを浮かべつつ、後部座席に並ぶ二人を見て頬を掻いていた。

車が走り去る後、母はそのまま夫の居る寝室へ行き……。